



文化も、ましてことばも違ってくるのに、うっかり「どうしてこんなことがわからないの」と、じぶんが慣れ親しんできた状況・条件の中だけで、ものごとを考え、対応してしまう。生きていくために必要な「慣れ」は、一方で他方・他人の苦しみ・悲しみ・痛みを理解しない、「じぶんさえよければ（他人はどうでもよい）」という無神経で身勝手な人間を作り出す。それがいま「地球は狭くなった」理由なのだろう。

狭くなったのは、現実の地球ではなく、わたしたち自身の頭で描いているバーチャルな地球であることを忘れて、わたしたちはどうしたらその幻の中でより多くの富と満足度を得られるかを計算している。「人生は芝居、世界は舞台」と、シェークスピアは言ったが、その舞台で芝居を演じているはずのわたしたち自身が、いまは演じることさえ忘れて、空想の舞台で、演出家兼俳優を気取っている。それが TV であろうと、DVD、ビデオ、インターネットその他なんであろうと、バーチャルな世界にはじゃまするものは一切ないから、いくらでも想像は広がる。ついじぶんがその場所へ行き、その人々に会い、見聞きしたつもりになる。

けれど、そこには、生身の相手と生身のじぶんの出会いはない。入ってくる情報が一方通行で、送り手は送るだけ、受け手は受けるだけの世界では、手を取り合って泣き、笑うことも、議論をすることも、ましてやけんかをすることもない。頭だけで納得しわかったつもりになるから、スイッチを切れば、次の瞬間にはすべてを忘れてる。知識や情報は、それがじぶん自身に関わる何か特別なもの・こととして起こったときに、はじめて現

実的なものとなり、実感として得られるものだから、じぶんの身に関わる体験がないと、手にしたつもりの知識・情報は、するりと逃げていってしまう。日本人が日本に居ながら、内戦や紛争の起こる国々の、その根本原因や和平が訪れない理由を理解するのがむずかしいのは、当たり前なのだ。

帰国して1ヶ月も経てば、わたしにでさえスリランカは遠い国になってくる。スリランカ情勢の予断を許さない状況を耳にしても、ここに居て直接彼らのためにできることはほんとうに少ないと実感する。

ましてや、日本人参加者がひとりもいなくなった NP スリランカ・プロジェクトが、非暴力平和隊・日本 (NPJ) とその会員の方々にとって、さらに縁遠いものになるのは、必至であろうと思われる。入ってくる情報が、読者の期待さえ満たさない、形式だけの報告文であれば、それはなおさら読後頭からやすやすと逃げていく。

では、手に入れた情報はどうすれば、じぶんの血や肉として蓄えられるだろう。あるいは、それははたして、ほんとうに必要な不可欠な栄養源なのだろうか。「栄養のあるサプリメントです」と言われて「はい、ありがとう」と手を出しているだけではないのか。あなたにとって、わたしたちにとって、そして NPJ にとって、ほんとうに必要な情報とは何なのか。なぜ情報が必要なのか。知識欲としての情報なのか、行動のための情報なのか。何に役立ち、何をするための情報なのか。そして 2006 年、NPJ は何をやりたいのか…。

NP スリランカ・プロジェクトの 2 年の任期を終え帰国したいま、再度出発点に立ちながら、わたしも考える。わたしは何がしたい

のだろう。NP/NPJ と何がしたいのだろう。

「非暴力の思想を広める」。これは、たしかである。おそらく会員の方々も、これには賛同して下さるだろう。では、どうやって広めたいのか。どこで広めたいのか。誰に広めたいのか。もちろん「どこで」と「誰に」は、「より大きな地域で、より多くの人々に」ということになるだろうが、ここでわたしが強調したいのは、「どうやって」という戦略・戦術部分である。「戦略・戦術」ということばは好まないが、言いたいことはわかっていただけだろうと思う。

つまり、きちんとした構想・プラン・方法論なしに、理想を語るだけでは、夢は実現しない。理事はもちろんのこと、NPJ の会員ひとりひとりが、「わたしはこうして非暴力の思想・輪を広めたい」というものを持ってこそ、議論は始まる。そしてその「こうして」の部分は、頭の中の狭いバーチャルな空間で繰り広げる壮大な構想ではなく、もっと卑近な、例えば「じぶんの子どもの学校で起こっているいじめ問題について、親と子、先生達と一緒に話せる場を作る」というような具体的な案がよいだろう。もちろんこれが直接NPJ あるいはNP の活動につながるかどうかはわからない。けれど、こうした地道な努

力こそが、そしてじぶん自身とその周辺に関わるるところから出てきた問題こそが、世界につながって行くのだと思う。

じぶんに降りかかっている問題に取り組むことで、地域の問題が見え始め、遠く海を隔てた場所に住む人々の苦悩や痛みが気になってくる。そのときにわたしたちは、世界のほんとうの広さと対立の深さが理解でき、いつかどこかでそれぞれの問題がすべてひとつにつながっていることに気づく。じぶんの足元にある問題の根っこが、地中、地球の奥深くで深く絡まりあっていることに気づく。

美しい緑の木々を育むには、豊かな土壌作りから始めなくてはいけない。そしてそれはじぶんの周りから始めていけばよい。

スリランカにまさか徒歩で(あるいは船でも)行けばよいとまでは言わないけれど、せめて一度は新幹線を夜行バスくらいに乗り換えて、日本国内を訪ねてみれば、狭かった日本が広くなり、東京では降っていない雪が、屋根を押しつぶすほどの勢いで降りしきる地方の人々の、不安と苦勞がわかるだろう。

新しい年の始まり。みなさまの周りから、足元から非暴力と平和の輪がますます広がりますように。



ドイツ・スピーキングツアーのオーガナイザーたちと

# 共同代表からの書簡

翻訳：小林 善樹

Letter from the NP Co-Chairs 2005年12月22日付の訳文です。

\*\*\*\*\*

## 親愛なる非暴力平和隊のメンバー団体のみなさん

非暴力平和隊・国際理事会 共同代表  
ティム・ウォリス  
クラウディア・サマヨア

この手紙が、目標と希望に沿って順調に発展しているみなさんとみなさんの団体に届くことを願っています。発表してありましたように、私たちは国際理事会(IGC)の会議を8月の最後の週にグアテマラで開催しました。この会議を稔り多いものとするために、コメントと意見をお送りいただいたみなさんに謝意を表したいと思います。

添付したのは、IGC 会議において採択された主な決定事項を要約したレポートです。〔編集部注：添付略、本紙10号理事会報告参照のこと〕 私たちは、9月に送られるべきこのレポートが、ヨーロッパの団体だけに送られていて、みなさんに送るのがこのように遅くなったことを申し訳なく思います。

IGC は、グアテマラ会議以降、ラテンアメリカ代表としてアントニオ・コエルホ(Antonio Coelho)の指名を承認しました。彼の指名によって国際理事会の定員はすべて満たされました。これは、来年私たちの戦略的計画の展開ならびに地域的展開の両面をカバーするために必要とされるすべての活動に取

りかかるためにきわめて重大です。

11月の電話会議で私たちは、新しくミンダナオ(フィリピン)でのワーキング・グループ活動を承認しました。このワーキング・グループは、地元の和平調停者が、紛争介入、トレーニング、同行、および草の根の早期警戒システムの能力向上によって彼らの活動を実行する能力を高めることに焦点を合わせるでありましょう。これらの活動を展開するために私たちは、そのための資金が調達できたならば、国際的な5人のチームを1年間雇用しようとしています。

1年以上たってしまいましたが、NPは、アフリカ地域暫定コーディネーターとしてレデンプター・リース・ビンタ(Redemptor Ries Binta)氏を雇用することを最終的に決定しました。彼女の仕事は、北ウガンダと南スーダンへのNP配備の可能性を追求することになるでしょう。この地域では、民族間の暴力が続いており、「夜の通学生」と呼ばれているおよそ4万人もの子どもたちが、難民キャンプから、この地域では比較的安全な町の中心ま

で、毎朝毎晩 12km の道を往復しています。  
私たちは、第二次派遣団のための条件を作り上げるためのいくつかの段階を進めながらも、スリランカでの活動を継続しています。10 月には、マルセル・スミッツが、ウィリアム・ノックスによって始められた活動を引き継ぐために、スリランカ・プロジェクトの新たな管理者として合流しました。このプロジェクトは、5 月に出された評価の結果に対応するよう、その構成を大きく変えました。11 月 17 日には、非暴力平和隊のいろいろなメンバー団体の 46 人のヴォランティアが、PAFFREL の国際選挙監視団の一員として参加しました。現在本プロジェクトは、契約を終えるフィールド・チーム・メンバーの交代要員として、フィールド・チーム・メンバー

の新規採用をおこなっています。

まもなくみなさんは、戦略的計画のプロセスを開始し、2007 年のメンバー団体すべての集まりのために準備するための連絡を、地域コーディネータから受けることでしょう。誰か電子メールや電話を通して、あるいは来年中に開きたいと考えている会議に自分で参加することによって、プロセスをフォローアップできる人を、あなたが指定することはきわめて重大なことです。私たちは、非暴力平和隊を、メンバー団体がもっと参加する組織にして行こう、と努力しておりますので、みなさんの全面参加を非常にありがたく思っております。

みなさんに平和な新年が訪れますように

.....  
.....

## 立命館大学「不戦のつどい」の行事に参加して

トランセンド研究会 藤田明史

非暴力平和隊・日本も協力しました立命館大学・不戦のつどいの報告を  
コーディネーターの藤田明史さん、参加者の池田早葉さんに報告していただきます

立命館大学では「わだつみ像」(国際平和ミュージアムに設置されている)の前で「二度とペンを銃に替えない」との決意を新たにするため、アジア太平洋戦争勃発の日の 12 月 8 日を中心に、毎年「不戦のつどい」が開かれている。第 1 回は 1954 年に行われ(その前年に「わだつみ像」を立命館大学が迎え入れた)、昨年(2005)は第 52 回目であった。その内の一つの行事、12 月 14 日～16 日に行われた日米学生が平和の構想を語り合うための企画平和憲法を生かす人々―戦後 60 年目の出会いにわれわれは参加した。国際協調主義の

学風で知られ、アナン国連事務総長の母校である米国ミネソタ州のマカレスター大学の学生を主体に米国から 20 名が日本を訪れ、立命館大学の学生約 15 名と 3 日間に亘り熱心に討論を行った。この企画の全体は君島東彦さんが立案し、私(藤田)は討論のファシリテーターを担当した。

第 1 日目は 13 時から始まり、まずマカレスター大学の学生 2 人に米国学生の代表として事前学習の成果を発表してもらった(彼らは日本でプレゼンテーションを行うことが単位取得の条件となっていた)。会議の全体を通



ここで、トレーニングの内容に関して、私がとくに感じたことを書いておこう。活動の基本的な理念に関して、非暴力平和隊とトランセンド研究会は当然のことながら異なっている。

して、言葉は（国際語としての）英語の使用を主とし、日本人学生のため必要に応じて日本語で説明することにした。マカレスター大学の日本人留学生がこの点で大いに助けてくれた。このあと、①日米関係、②日本国憲法、③非暴力、④ヒロシマ・ナガサキの4つのグループに分れ、グループ・ディスカッションを行った。各グループに大学院生を1人配置し、議論の進行役ならびにリソース・パースンになってもらった。議論の具体的な内容や方向は彼らに一任した。日米学生の意見交換を主体に、とても深い議論が行われていた。17時からグループ毎の討議内容の発表を行い、この日の予定を終了した。学生たちは夕食のあと寒さをものともせず嵐山に出かけていった。

2日目は14時40分から非暴力のワークショップに当てられた。非暴力平和隊の大畑豊さん、トランセンド研究会の奥本京子さん、中野克彦さん、それに私がトレーナーとして参加した。まずそれぞれの概念・活動内容をかなり詳細に紹介したあと、4つのグループに分れてトレーニングを行った。学生たちは、「非暴力」や「トランセンド」とは何かを、自分なりに深く理解しようと、とても積極的に参加してくれた。

しかし、活動の具体的な点ではお互いに学ぶべきことが多いに違いない。そこで、それぞれの長所を取り入れて（BOTH-AND!）、非暴力トレーニングのための有効な一つのメソッドを作れないものだろうか。これは、われわれが今後いつそう緊密な協力関係を築いて行く中での、一つの課題ともなるのではないか。

最終日は、いよいよ「戦後60年日米学生共同アピール」を発表する日である。18時半からの本番にそなえ、学生には14時に集まってもらった。日米学生がこの2日間で必死になって考え、おそらく夜を徹して作成したに違いないそれぞれのドラフトを、一つにドッキングする作業がまだ残っていたからだ。英文版がより完成していたので、日本語版にだけある論点をそこに追加していくという方法をとった。細部の表現をめぐるさらにも多くの意見が出され、しかも各自が自分の意見を主張したから、学生たちの作業は難航した。しかし発表の1時間前によく完成にこぎつけた。会場で学生代表が自信を持って発表するアピールを聞きながら、学生一人一人が「やった！」という満足感をもったのではないだろうか。結果として、とても感銘深いものになったと思う。

# 日本・アメリカ・世界の市民にむけてのアピール

2005年12月16日

アメリカと日本の学生の間で平和と非暴力に対する無関心さが広がっています。憲法九条の理念は国際社会において高く評価されている一方、日本国内においては憲法の平和主義と自衛隊イラク派遣の間の対立が深まっています。

現在、アメリカ政府の圧力の元で憲法九条の精神が踏みにじられています。

憲法九条の非暴力主義の精神は、沖縄、広島、長崎などでの被害者としての体験と、中国、朝鮮半島などへの加害者としての反省から生まれたものです。

暴力・軍事による紛争解決は暴力の連鎖を断ち切るのに有効ではありません。私たちは、創造力、行動力、現実認識、そして教育によってのみ、社会変革を起こすことができると確信します。

アメリカと日本、そして世界の市民に対して、私たちは次のことを呼びかけます。まず、非暴力によって平和がどのように守れるかという対話に、地域・国家・国際レベルで、積極的に参加すること、また、東アジアに大きな対立を生む憲法九条の改定をするのではなく、九条の理念を活かし、さらに非暴力的な人道支援を可能にする解釈に改めること、さらに、平和ミュージアムをつくり、戦争体験者の証言を多くの言語で語り継ぎ、より幅広いメディアを通じて次世代に発信するなどして、戦争の悲劇を二度と繰り返さないように努力すること、最後に、アメリカ政府のイラク戦争に反対すること。

私たち、立命館大学、マカレスター大学、ミネソタ大学、ハムリン大学の学生、および非暴力平和隊の会員は、この「不戦のつどい」の3日間で議論した成果として、未来に向けての以下のような行動をしたいと思います。

次世代に向けて、戦争の経験を語り継ぎ、教えること、大学およびその地域で、核軍縮、憲法九条、日米関係、非暴力などに関する問題を提起し、認識を高める場を作ること、最先端のテクノロジーを駆使し、双方の文化を理解しながら世界的な平和市民のつながりを形成すること、平和と非暴力の概念が政策に反映されるように、政府に対し、自分自身の責任として働きかけること、行動と学習の双方を通じ、世界の平和・正義・平等の大使として働くこと。

以上のことをここに宣言します。

## 「不戦のつどい」に参加して

池田早葉(立命館大学国際関係学部 3 回生)

はじめに

「不戦のつどい」が立命館で行われることを知ったのは憲法の授業での事でした。いつも授業の途中で休憩を挟む君島先生が、その日は休憩を利用して「不戦のつどい」のことを知らせてくれたのです。普段は無関心に横目でお知らせのプリントを眺めるだけの私なのですが、「不戦のつどい」には少し興味が沸きました。名前が少々胡散臭いにも関わらず、そのテーマが憲法の授業で学んだ九条や、非暴力についてであったこと、交流相手と同じ様な勉強をしているアメリカの学生であったこと、平日の放課後に立命館で開催されるという参加のしやすさなどが魅力でした。特に参加しない理由も見つからず、迷うことなく次の日早速参加用紙を提出しました。

初日、「不戦のつどい」はマカレスター大学の学生によるプレゼンテーションで開会され、いくつかのテーマに分かれてのディスカッションへと移りました。私は憲法九条についてのテーマを選んだのですが、積極的に意見を述べる事ができたと思います。二日目は NGO の方達によるワークショップが行われ、そこでも各自希望のテーマを選ぶことが出来ました。参加者は皆とても熱心で親しみやすく、生き生きとした雰囲気です。二日も交流出来たと思います。

その中でも、個人的に初日のディスカッションはかなり内容の濃い充実した出来だったと思います。その内容を簡単にまとめて紹介したいと思います。

憲法九条についてのディスカッション

### 話題 1、憲法九条は必要か

・第二次世界大戦後、二度と戦争を繰り返さないために九条はつくられたはず。平和を基調とする秩序を作り出し、それを維持するために九条は必要とされている。日本は憲法九条がある限り、少なくとも自衛隊以上の軍隊を持つことが出来ないという限りにおいて有効なのではないか。

・しかし今の九条への解釈には問題があるはず。仮想敵国の軍事レベルによって自衛隊の合憲と推定される能力も高まってしまう。核武装も可能とされるような状況にならない保障はない。九条に違反しないとされる自衛隊は、日本では自衛『隊』と呼ばれているが、海外では Self Defense “Forces” と呼ばれている。

私も憲法九条は必要だと思うし、現在の日本政府の解釈にはかなり無理があると思います。実際、日本の軍備は世界有数の力を現在持っているという現実、九条が本来の役割を果たしていないことを示していると思います。

### 話題 2、九条の性格を変えるべきか、改憲は必要か

・現在日本では改憲論が高まっており、憲法を現実に即したものに変わるべきという意見がよく耳にされる。しかし変えるべきは憲法ではなく、憲法に即さない現実であると



いうことをはっきりさせるべき。

・「押し付け憲法」という改憲論者は主張するが、日本国憲法の起源をたどれば決してアメリカが勝手に作ったものではないことが確認できるではないか。

・今改憲を進めれば、政府はどさくさにまぎれて九条を戦争可能な性格のものへと大幅に変えてしまいかねない。

私も九条の性格を今変えるのはかなり危険だと思います。また、憲法とはその性質上民衆によって政府に押し付けられるべきものであることを踏まえると、改憲論者の主張にも賛成できません。しかしここで、非暴力の概念をなくしてしまうのは問題だが、今のままでは世界で起きている様々な紛争解決に日本は参加できないのではないか。という意見が出されました。

### 話題3、現在の九条で人道的介入は可能か

・東ティモールのように収拾の目処のつかない紛争を解決に導くために軍の介入が必要な場合もあったではないか。この場合軍隊は有効である。また紛争地帯に丸腰で赴いて交渉を可能にするような甘い状況でない場合は数多くあるため、武器はある程度必要である。本当に人道的介入が必要な場合でも、日本は九条のために何も出来ない、または九条を口実に何もしない様なことになるのであれば、九条の存在は問題である。

・九条があっても日本は人道的介入が出来る。交渉に協力したり、医療面や、難民支援、そのほか現在 NGO がやっている様な活動を日本は政府主導でいくらかでも出来るはずであり、それこそ九条の求めている態度なのではないか。

もちろん身を守る最小限の武器が必要な場合はあるかもしれないが、九条は決して日本を人道的介入から遠ざける性格のものではないはず。

私も、軍事力がなければ戦争を止められないという発想はおかしいと思います。日本政府はイラクに「人道復興支援」という名目で自衛隊を送り、一方で、主体的に平和に関わろうとした日本人の行動を無責任と批判しました。彼らの行動こそ非暴力平和主義の理念に基づくものだったはずです。現在の九条の解釈では本当に望まれている形の人道的介入は見込めない気がします。

### 話題4、今後日本は九条をどうするべきか

・現在の日本の九条への解釈は非常に受身であり、なにもしないという状態にとどまっている。そのため日本の内外を問わず、九条の存在が問題視されてしまうのではないか。改憲しようとせずに、九条をより能動的に解釈して、九条の下で出来る事をもっと考えていくべき。軍事力なしに世界で起きている様々な問題を解決し、国際社会の良い見本になるべき。

・非暴力の概念を消すためではなくて、九条の求める態度をより詳しく規定したものに改憲するべきなのではないか。もちろん前文と九条にすでに明記されているが、より分かりやすく勝手な解釈を不可能にするものにしてはどうか。

九条の勝手な解釈を不可能にするための改正には賛成したいと思うのですが、やはり今改正するとなると、悪い方向にしか改正されない気が私はします。今すべき事は、時

間はかかっても地道に九条や前文の理念をより多くの人達に広めることだと思います。

一度ディスカッションが始まると、時間はあっという間に過ぎてしまい、最後は名残惜しい雰囲気が終わってしまったのですが、とても思い出に残る経験になりました。何よりも、私が話をする間中ずっと私の目を見て熱心に耳を傾けてくれるマカレスター大学の学生達の態度にはとても励まされたし、普段あまり接することのない他学部の学生達との意見交換は大変よい刺激になりました。

## 二日目のワークショップ

二日目のワークショップは、前日のディスカッションに比べると皆顔見知りになったということで、和気藹々と進行しました。まず始めに、NGOの活動を行っている方々がその理念や活動内容を説明してくださいました。通訳を介して行われた英語でのプレゼンテーションだったので、時間が足りず通常の半分しか説明できなかったという点は、お互い残念だった気がします。フィールドワークの体験談や、参加型の WinWinGame の説明はとても興味深かったし質問も沢山だったので、その度に必要となる通訳はその場のテンポを崩す事になりました。

休憩をはさんだ後、実際にNGOの方との体を使ったワークショップが行われました。幾つかのグループに分かれる事になったので、私は非暴力平和隊・日本共同代表の大畑さんによるワークショップに参加することにしました。暴力と平和をテーマにブレインストーミング、皆で円になって指を指された人が決まったポー

ズを瞬時に取るという反応を試すゲーム、ペアを組んで時間内に自己紹介をし、その後相方になりすまして自己紹介をするというゲームなどを通して、対話や相互理解の重要性を学びました。

非暴力平和隊の方が活動のためのトレーニングで行ったゲームをするとはじめに聞いていたので、勝手にアクション映画のような動きを学ぶと思っていた学生が私を含めて大半を占めていました。そのため最初は簡単なゲームを提示されて少し戸惑ったのですが、実際にゲームをしてみると、どれも頭を使って見たり、聞いたり、話したりしなければ成立しないので、簡単でもとても大事な事を学んでいるのだとすぐに気が付きました。

学生が10人以上集まってゲームをするとなると当然のことですが、それだけで盛り上がり、ふざけたり、罰ゲームを決めたりして、みんなで楽しく取り組めたと思います。

## さいごに

二日間の「不戦のつどい」での経験は、私に普段得られない刺激や充実感を与えてくれました。そして、この様な機会があればまた是非参加したいと強く思った私に、新たな興味や目標を持たせてくれました。そして何よりも、「不戦のつどい」は私に、これまで希望しながらもあと一歩踏み出せずにいたNGOへの参加の機会を私に与えてくれました。君島先生の活動している非暴力平和隊には以前から興味があったのですが、今回のワークショップを通して、活動に参加したいとはっきりと感じるようになったのです。

参加の形式としては会員として勉強会などに参加するというのも考えたのですが、NGOの役割や機能、運営のされ方などを直接的に学びたいと思い、インターンを希望しました。この件を君島先生にお願いしてみたところ快く受け入れて下さり、このたび非暴力平和隊・日本でインターンをさせていただくことになりました。

知識の乏しい未熟な私ですが、非暴力平和隊・日本が関西で多くの人を巻き込んで活動で

きるよう、講演会や勉強会などの企画を手伝いたいと思います。また、非暴力平和主義の理念の下で主体的に平和秩序の構築を働きかけるという市民活動に自分が参加しているという自覚を持って、世界で行われている数々の問題に敏感に反応し、貪欲に知識を吸収していきたいと思います。

---

## 「ブラッドフォード大学 平和学部」で学んで

会員 中原 隆伸

私がイギリス北部にある、ブラッドフォード大学で平和学を学び始めて早いもので4ヵ月がたちました。今回は、自分が今までこの大学で学んで得た感想を書き綴ってみようと思います。

町自体は人口およそ30万位の(全英で10番目に大きい都市だそうです)地方都市で、昔パキスタンからの移民が職を求めて大勢やってきたため今でもパキスタン系の人が多い町です。気候は11月中旬に急激に冷え込み、12月に入ってからかなり暖かくなりましたが、それでも夜はかなり寒いです。

私が留学先としてブラッドフォードを選んだのもそのためなのですが、日本で平和学というと、一番先に名前が挙がるのがこの大学ではないか、と思います。実際、他の国から来た留学生も同様にブラッドフォードが平和学を学ぶために有名だから、

という理由で来ている人が多いです(そして、当然そういう人たちは学ぼうとする意欲がとても高く、いつも刺激を受けています)。他の大学の平和学部についてあまり知らないのですが、ここが一番!などと断定はもちろん出来ないのですが、確かに平和学を学ぶ上で素晴らしい大学(院)だと思います。ただし…!私としてはひとつ気に入らない、というか少し?かなり?がっかりしているところがありますけれど。

講義の質は(少なくとも修士課程では)かなり高いです。安全保障分野がご専門のポール・ロジャース教授を始め、この分野ではかなり有名な人がごろごろしていて、しかもほとんど全ての方がとても気さくで面倒見のよい方たちなので、勇気を出して話しかければすぐに打ち解けられます。日本とは違って相手が誰であろうが「ジム」「ポール」「オリバー」とファーストネームで呼びかける雰囲気は、少し慣れるまで

時間がかかってしまいました。最初に手渡される講義要綱に一応「リーディングリスト」という欄はあるのですが、特に必須というわけではなく「興味ある人は読んでみたら？」という感じで、けっこうスパルタ教育的なものを想像していた私としては「こんなゆるゆるで大丈夫なの？」と思ってしまったぐらいです。完全に学生の自主性に任せるといった感じなのでしょう。ただ、殆どの授業で2週間に一度15人ぐらいのグループに分かれてのセミナーがあり、その際は事前に論文などを読んでくる事が求められます。

講義以外でもいろいろ気に入っているところがあって、例えば図書館の2階にある小部屋にガンジーやその他の平和活動家、非暴力等多くの書籍があって、そこはとても気に入っています。当初は足繁く通っていて、最近あまり行っていないのですがエッセイの一つを非暴力関連で書こうと思うのでこの冬はそこに頻繁に通うことになりそうです。また、以前NPJのメーリングリストにも投稿させて頂いたのですが、週に一度ぐらいあるゲストスピーカーも外部の方の話を聞くととても貴重な機会になっています。

英語力に関して言えば、私もそうなのですが日本人学生の特徴として「読む、話すは問題無いけど書く、聞くが大変」という人が多いのではないかな、と感じました。エッセイ4~5本(1本最低2500単語)を毎学期書く、という結構大変な状況なの

で、英語での作文力はとても大切だと思います(というか、非常に鍛えられます!)エッセイに関しては、アドバイザーが結構親身になって見てくれ、11月上旬に最初のエッセイの締め切りがあったのですが、その時は10枚以上に渡るエッセイを見て論理のおかしいところはもちろん細かい文法までチェックしてくれたので大変助かりました。

私自身が一番大切だな、と思うのがリスニング力で、授業もディスカッションも、「聞けないから話せない」といった状況になりがちだと思いました。こういうディスカッションでは意地でも何かいわないと気の済まない私は、出来るだけ最初に何か意見なり、感想なり言って発言したことにしていましたが、それでも最近は議論の途中で周りの意見を若干は踏まえた意見を言える様になり、少しは慣れてきたかな?と感じています。

ちなみに出身国で一番多いのはイギリス人だと思うのですが、2番目に多いのは今年日本人のようで、100人ほどの学生の1割強を占めます。また、さらに学生のバックグラウンドの話をさせていただくと、世界中本当に色々な国からの学生がいて、とても多様性に飛んでいます。年齢はフルタイムの学生の平均を取ると多分20代後半になると思うのですが、一番若い人で21歳(イギリスは学部が3年で終わるので)、年齢は聞いていないのですが40台かな?という人も何人かいて、かなり全体

としてバラエティに富んだ構成になっています。

ただ、専門分野には偏りが大きく見られません。修士課程でも3つの専攻があって「Conflict Resolution（紛争解決）」、「International Politics and Security Studies（国際政治・安全保障論）」、そして「Peace Studies（平和学）」とあるのですが、Conflict Resolutionは大体60人ぐらい、IPSSは30人ぐらい、Peace Studiesは私も含めて10人に満たない学生しかいません。例年ConResoは応募人数も高く、生徒数も一番多いのですが今年はIPSSの生徒が増えた、という話を聞きました。

この学生数の偏りは講義科目にも強く反映されていると思います。全体として確かに出席していて非常に興味深い内容なのですが、ガンジーの理論、平和運動の歴史、

非暴力的紛争の転換といった内容の講義は「平和学入門」以外は「紛争解決—概念と経過」という授業で少し出てきただけです。学部全体として、いかにして武力紛争の発生を食い止めるかという技術的な方法論に集中しているような気がするのですが、もう少し平和学そのものについて研究する授業も増えればもっと素晴らしい構成になるのではないかと思います。

それと関係はあまりない話なのかもしれませんが、現在あるThe Centre for Conflict Resolution（紛争解決センター）という名称をThe Centre for Conflict Transformation（紛争転換センター）という名称に変更しようという議論も進んでいるそうです。在学生として、そして近い将来卒業生になる身として（無事エッセイなどが通ればですが…）今後ともますますこの学部が発展してゆくことを期待しています。

## スリランカ視察旅行記（下）

NPJ 理事 大橋 祐治

（10号より続く）

### 2. 訪問先の印象:

#### ジャフナ、キリノッチ、ムラティフの旅

#### ジャフナ空港——シンハリ人の陸の孤島

コロンボ（国内線）、ジャフナの空港は共に軍（空軍）の管轄下にある。そのた

めいづれの空港も空港施設に入る手前で軍のチェックを受けるが、特にジャフナの空港はチェックが厳しい。ジャフナは政府軍が点と線を確認しているだけで面はLTTE支配地域であるからであろう。ジャフナ空港にはターミナルのような建物は無く、駐機場からバスに乗せられか

なり離れた所で降ろされる。コロンボで荷物検査を済ませているので、到着時には検査は無いが、トラックで運ばれてきた荷物を自分で取出し、それを市内行きのバスの荷物トランクに入れなければならない。30度を越える暑さの中での作業は結構きつい。

ジャフナ市内のバス停まで約40分、その間の道は戦前の日本の田舎道を想像させるような悪路であるが、High Security Zone と書かれた道沿いにはかなり短い間隔で土嚢を積上げた塹壕があり兵士が銃を構えている。また、一列縦隊で銃を構えた兵士が巡回しており、林越えには兵舎が点在しているのが見え、休戦中ではあるが緊張感を感じさせる。空港への往路（コロンボ行き便）では、途中のチェックポイントで全ての荷物を車から降ろして検査し、且つ、空港近くのチェックイン場所で改めての検査があった。

### ジャフナ市内――内戦の傷跡

ジャフナの街は銃弾の後が残された建物がそのままの姿で廃墟であったり、使用されたりで、少しでも街を外れるとHigh Security Zone にぶつかり、内戦の傷跡に至る所に残して数十年そのままの状態を過ぎた様子である。その中で市民はたくましく日常生活を営んでいる。

予約していたホテルで収容しきれなかったため、PARC（アジア太平洋資料センター）のジャフナ駐在員小野山さんの

お宅に泊めていただいた。PARC はジャフナに拠点を持ち、ここから主として北部地域の復興支援・津波被害支援を行っている。NP の大島みどりさんも津波被害の時はジャフナ駐在であり、被害の状況把握や罹災者の救援等大変忙しく活動されてる様子のみどり報告で知ることが出来た。今、ジャフナにはNPの拠点は無い。

### キリノッチー――LTTE 本拠地の街

キリノッチはジャフナの南、国道9号線（幹線道路）に沿って70km ぐらいの所にあるLTTEの本拠地である。エレファント・パスと名づけられた両側が干潟に挟まれた狭い通路を過ぎてからHigh Security Zone になり、道路はジャフナ空港の道と同様、兵士の塹壕や、兵士の縦隊の見回りの景色になり、両側の荒地を見ると頭骸骨の印にDANGER と赤い字で書かれた標識が点々と連なり地雷原が続く。そして政府支配地域の終わるところで政府側のチェック・ポイントがあり、身元検査のため全員車を降りて各自パスポートを持ち検問を通過する。その後、1-2km の緩衝地帯（NO MAN'S LAND―ここは国際赤十字や国連が監視しているらしい）を過ぎると今度はLTTE のチェック・ポイントがある。ここでは身元検査のほかに荷物検査も綿密に行われ、結局1時間以上かかった。ジャフナより100km 足らずの道を4時間近くかけてキリノッチに到着。復路も

同じことの繰り返しである。

### ムラティブー—津波で全村壊滅

ムラティブはキリノッチから 40km ぐらい東の海岸に面した比較的大きな漁村である。ここが津波により家の土台跡を残して全村壊滅してしまった。海岸近くのカトリックの教会の建物が一部柱と壁を残して、ここに村があったことを物語っている。津波当日（今年の 12 月 26 日の日曜日）、何時もここで日曜日のミサが行われるのだが、この日はたまたま別の所でミサが行われたので百数十人の人が津波を免れたとのことである。TECH の職業訓練センターは海岸から数キロ陸地に入った少し高台になっているところに建てられた。裁縫センターの生徒はすべて肉親の誰かを津波で失った人達である。彼女たちの悲しみを超えて前だけを向いて生きようとしている姿に TECH・JAPAN の人達が何とか応えよう



教会の一部だけ残ったムラティブの津波跡

教

会の一部だけ残ったムラティブの津波跡

としている熱意が伝わってくる。

### コロンボー—南北格差

ジャフナから空路コロンボに到着し、空港からホテルまでの道すがら、何という貧富の差であろうかとスリランカの南北格差を見せ付けられた。一週間足らずの間、一つの国でこれほどのカルチャーショックを感じたことはないと思う。日本から見ればコロンボの街並みはどうと行ったこともないであろうが、ムラティブからキリノッチへ、キリノッチからジャフナへと徐々に街らしさを増していくのと対照的に、ジャフナからコロンボは突然別の国に来たような戸惑いを覚えるほどの変わりようである。

町はもう大統領選挙に入っており与野党の大統領候補のポスターがべたべたと街中に張り出されている。久しぶりに見る英字新聞によると、与野党とも単独で過半数を制する可能性は少なく、少数政党との連携を模索し、様々な条件提示を行っているようである。そこには和平交渉に関する政策は何も言及されていない

ようである。和平交渉、即ち、LTTE に言及すること自体が大統領選挙、或は、そのための連携を不利にするからと聞いた。ホテルへの道すがら感じたことは、一つはこの国も政治が最大の問題であること、そして、もう一つはコロンボに居たのでは全体が見えないのではないかと言うことであった。

長時間のフライト（往路 11 時間、帰路 8 時間半）は 5 年ぶり、当初はなかなか腰が重かったが、いったん決心した後は、気持ちも昔に戻ったようで出発から帰国まですべて順調であった。ただ、帰国後、少し疲れがでたようで改めて年を感じさせられた旅ではあった。

## PBI インドネシア レポート

2006 年 1 月 22 日

PBI ボランティア・スタッフ 藤村陽子



皆様、ご無沙汰しております。レポートの方が長い間書けずに申し訳ありませんでした。御存じの方もいらっしゃると思いますが 11 月はじめに、デング熱にかかってしまいました。症状のほうが比較的重かったので、メダンというバンダアチェに一番近い大きな町へ行き、病院に 1 週間ほど入院していました。その後、熱は下がったのですが体調がまだ悪かったので、その足でジャカルタまで行き、そこの PBI オフィスで約 1 ヶ月間静養していました。体調が回復した後、ジャカルタで 1 週間ほど仕事をし、ようやくアチェに帰ることができました。

2 ヶ月ぶりにアチェに帰ってきて思ったことは、高価なレストランの数がかなり増えたことです。ピザ、トルコ料理、中華など、外国人をターゲットにしたものが

たくさんでき、料金も私からすれば目の飛び出るほどの価格です。アチェは今、インドネシアで一番インフレーションの高い地域だと、インドネシアの新聞に出ていましたが、こういったレストランも影響しているのだと思います。

こういった中で、失業中のアチェ人、未だに仕事の見つからない元 GAM メンバーはたくさんいます。最近ではゆすりや盗みなどの犯罪件数が増えてきたと、いくつかの地元 NGO が言っていました。

政府は未だに元 GAM 戦闘員や紛争被害者に賠償金を支払っていませんし、MoU (Memorandum of Understanding、和平合意) の中でもこのことについては書かれていません。幾度かの話し合いの末、インドネシア政府と自由アチェ運動 (GAM/Gerakan Aceh Merdeka/Free Aceh



Movement) がフィンランドのヘルシンキで8月15日に和平合意にサインされ、その結果、まずは形的には約30年続いた紛争に終止符が打たれることになったのです。この和平合意のなかには、アチェでは非常に重要な役割を果たしている宗教的リーダー (Ulama) の役割、紛争被害者へのサポートや賠償について何もかかれていません。政府は今後検討すると言っていますが、期限が決められていないのであやふやなのです。

GAM のトップメンバーなどは政府機関などで職を得ているケースがありますが上記の GAM メンバーや夫を殺された未亡人や両親を殺された子供たちに目を向けなければ、真の平和は構築できないと思います。

さて PBI ですが、私たちは今月半ばに中アチェ県へアセスメントに出かけました。そこで、地元の NGO が私たちを必要としているかどうかを調べにいったのですが、どうやら今すぐには必要ではないのではないかという結論に達しました。地元の NGO が他の県のものに比べてあまり活発ではないこともあって、PBI が同県内に滞在して活動するという可能性は低いと考えたのです。しかし、同県が平和かという一概にはそうは言えません。同県では武装市民軍の存在が平和プロセスを脅かすのではないかという声もありますし、彼らも紛争被害者なので何らかのサポートが与えられなければ何が起

るかわかりません。ただ残念ながら同県では PBI に今できることはないようです。

また、PBI は今月平和教育部門のメンバーのトレーニングを行いました。特にアチェでは、平和教育の部門での活動を広げていく予定ですので、新しいメンバーももうすぐ加わると思います。しかし、現在 PBI の中で人材不足の問題があり、アチェチームから何人かをパプアまたはジャカルタに送らなくてはならないようになりました。これは私たちにとっても悲しいことです。アチェでの護衛的動向の依頼が減少したことや、PBI クライアントが私たちのサービスをあまり必要としなくなったことも背景にあります。今まで私たち全員がひとつになって数々の難関を越えてきたり、活動をしてきたことを思うと心が痛くなります。私は残りの2ヶ月間、引き続きアチェでの活動を依頼されました。2月には平和ディスカッションを催したり、トレーニングを企画しなくてはいけないので、アチェを去っていくメンバーの分も全力でがんばりたいと思います。

平和ディスカッションですが、これは以前にも PBI が地元 NGO に平和に関するトピックを議論する場を与えて彼ら自身がディスカッションをリードし、私たちが教えるのではなく地元の NGO の間で何かを生み出せばという考えを基に行ってきたイベントです。今回は私がその責

任者となり、指揮を取っています。今回のトピックは‘アチェの平和プロセスにおけるイスラム教の役割’です。PBI は non-partisan ship (特定の主義に偏らな



お正月に行ったアチェの小さな島、サイバン島で

い主義)にのっっています、イスラム教はアチェの中で重要な役割を果たすのではないかという考えの下に決めました。2月はじめに催されるディスカッションなので、少し急がなくてはいけませんがんばります。

私が病気のときはどうもご心配をおかけしました。皆様も寒い中、お体を壊さないようにお気をつけてご活躍ください。アチェはもう乾季に入ったようで、毎日暑い日が続いています。

---

## 冬季カンパにご協力いただきありがとうございました

昨年夏に続き、この冬もカンパをお願いいたしました。

昨年末から始めて年明け 20 日を一応の期限としておりました。1 月末現在、下記の 38 名の方々から、合計 57,4200 円をお送りいただいております。深くお礼申し上げます。

今後も非暴力平和の運動が活発に展開していけるよう、活動・会員の拡大に、努めてまいります。皆様のご支援、ご協力よろしくお願い申し上げます。

共同代表 君島東彦 大畑 豊

事務局長 安藤 博

### ★カンパにご協力いただいた方々 (順不同・敬称略)

大橋祐治、権藤文代、小林善樹、東豊久、中村健、木村護郎、日隅一雄、三宅信一、大柳香代子、松宮光興、蛇石郁子、藤岡惇、古谷和子、石田明義、中里見博、宇野朗子、内木茂、小林善樹、黒岩萌実、正田利子、高柳博一、木村朗、神山邦子、江川嘉美、本東宏、馬淵広子、田中泉、安藤博、大畑豊、遠峰喜代子、前田恵子、君島東彦、馬渡雪子、蓮見順子、鞍田東、田中春美、青木護、高橋謙一

# パレスチナ評議会選挙 国際選挙監視団に参加して

N P J 理事 大橋祐治

N P によるパレスチナ評議会選挙の国際選挙監視団への参加呼びかけに応じて、1月25日に実施された評議会選挙の国際監視団に参加し、1月28日夜帰国しました。選挙後の26,27日、滞在中のエルサレムでは、CNN, BBC のニュース番組はいずれも各時間のニュースの冒頭でパレスチナの選挙結果を報道し、イスラエル/パレスチナ問題が世界の最大の関心事の一つであることを実証しました。このことは日本でも同様でした。イスラエル/パレスチナに一週間滞在して感じたことは、この地が紛争の原点の一つであり、この問題の解決が世界の平和の推進に大きな影響を与えるとの確信でした。

## (1) 選挙の結果と選挙の正統性

選挙結果はハマスの圧倒的勝利に終わりましたが、誰もが予想できなかった結果であり、又、イスラエル/パレスチナ和平の今後の行末も現段階では誰もの確かな予想は出来ない状況にあるようです。

しかし、一つだけ確実なことは、今回の選挙が正当なものであり、パレスチナ人の民意を示したものであると言えます。77.6%と高い投票率もそのことを証明していると思います。

選挙結果を理解するための一助として、

今回の選挙の仕組みと結果を簡単に説明します。評議会議員は選挙区（地方区）選出66名、比例区（全国区）選出66名、合計132名です。選挙結果は、ハマス派が選挙区で46名、比例区で30名、合計76名（最終結果は74）、ファタハは選挙区で16名、比例区で27名、合計43名（最終結果は45）でした。即ち総議席数ではハマスの圧倒的勝利ですが、これは選挙区で大勝したためであり、比例区では30議席対27議席と接戦となっています。

もう一つ、イスラエルが実効支配している東エルサレムでの選挙です。パレスチナ有権者全体の12%弱、20万人の東エルサレムに住むパレスチナ人の多くは、雇用を始めイスラエルの経済的支援のもとに生活をしており、これまで政治的な活動に消極的であったといわれていました。今回の選挙でも、ハマスの選挙運動は禁止され、大半の有権者はエルサレム郊外のイスラエル軍のチェック・ポイントの外に設定された投票所に行かねばなりません。チェック・ポイントを通ることがどのくらい大変であるか、ゲートの前は通勤電車並みの混雑振りであり、押合い押し合いでゲートに擦り寄っていかねばなりません。チェック・ポイントを通るのにどのくらい時間がかかるかは、まったく予想できません。

これは私の経験です。

東エルサレム選挙区でチェック・ポイントの外に投票所を設けたのは、イスラエルの政治的な理由ですが、選挙結果は定数6名に対し、クリスチャンに割り当てられた2名以外はファタハに代わりハマスが独占しました。

今回、国際選挙監視団の中核をなしたEU選挙監視団、カナダ選挙監視団、カーター・センターいずれも選挙後のプレス・リリースでパレスチナ人の民主的行動を評価し、両陣営並びに国際社会が選挙結果を尊重するよう呼びかけています。

## (2) 国際選挙監視団

パレスチナの中央選挙監視委員会(CEC)の要請に応じて、世界各国の政府、NGOは実に78団体、1,064人の国際選挙監視団を派遣しました。パレスチナ全有権者は170万人前後ですので有権者1,700人に1人の割合で国際選挙監視員が送られたことになります。



ヤッフォ門近くの仮設郵便局投票所にて；左からアメリカ人ビル・ローズ、大橋、アメリカ人ヴァーノン・フッフマン、スペイン人マルタ、と同じくギレム

国際監視団の中心となったのは、EU選挙監視団、カナダ選挙監視団、カーター・センターであり、総勢437名、NPのような短期監視チームは627人でした。78団体のうち政府派遣団は26カ国以上で、その中には日本政府派遣団(20名強)が含まれています。これとは別に日本政府はCECとこれを支援する国連開発機構に総額72万ドルの資金援助を行っており、このことは国際監視団のオリエンテーションの場で紹介され会場から拍手が沸き起こりました。

## (3) NPの参加者と自己責任

NPのパレスチナにおけるメンバー団体が加盟しているGIPP(パレスチナ市民のための国際的草の根保護運動)の要請に応じ、NPの呼びかけで参加したボランティアは約40名でした。

今回は、予想不可能な潜在的リスクを伴うものでしたので、参加者は「不測の事態が起こってもすべて自己責任で、一切クレームを行わない」との念書を差し出しました。

約半数はアメリカ人でしたが、カナダ、英国、ドイツ、スペイン、キプロス、ボリビア、それに日本などで、日本からは私のほかにイギリス留学中の中原隆伸氏が参加しました。

NPの選挙監視地域は当初からガザ地区は除外されており、東エルサ

レム、ラマラが監視対象であると示されました。国連開発機構、中央選挙管理委員会や中核的国際監視団からの2日間のオリエンテーションを終え、投票の前日の24日にGIPP主催の会合で、午後によく監視地域に関する割振りが行われました。原則的に監視チームは3人一組で、チームに1人の現地のボランティアが通訳として付くという説明がありました。移動手段は各自めいめいの工夫です。



ラマラ市の中心街、ナマラ広場で投票を呼びかけのデモ

私は東エルサレムを選択しましたが、監視場所はエルサレム郊外の（即ちチェック・ポイントの外の）投票所14箇所、チェック・ポイント11箇所、市内の臨時投票所となる郵便局6箇所で、GIPPからは、国際監視チームには問題が起ころうな（イスラエル兵の選挙妨害が予想される）4箇所のチェック・ポイントと市内の郵便局6箇所を担当して欲しいこと、何処を担当するかは3人一組のチームで決めて欲しい、と言うことで監視場所が書かれた白板が用意され、競って各自希望する監視場所の横に名前を記入していきました。

監視場所を自分で選択するのも自己責任に対応したものです。

私がおその様子を眺めていました

ら、Vernon Huffmann というアメリカ人が一緒にやらないかと声をかけてくれて、誰も書いていない“カランディア”チェック・ポイントに名前を書いてもらいました。Susanna Farahat という若いアメリカの女性も加わることになりました。“カランディア”チェック・ポイントはパレスチナ自治政府のあるラマラと東エルサレムを結ぶ幹線路にあり（最も現在は東エルサレムをラマラから完全に防御するための大掛かりな工事が行われております）、チェック・ポイントとしては一番交通量が多く、何かと有名な場所なので皆が敬遠したものだと思われます。しばし自己責任とは何かを痛感しました。

自己責任であることを改めて感じたもう一つの事例は次のようなことです。

選挙当日を除き、前日までの3日間と翌日の合計4日間、デビッド・グラントのほか東エルサレムの旧市内に滞在の者は、毎朝決められた場所、時間に各自集合し、10分ほど歩いた所にあるパレスチナ人のバ

ス・ステーションに向かいます。ここでラマラ行きの（と言うよりはチェック・ポイント行きの）バスに乗り、チェック・ポイントで降りて、チェック・ポイントを通り反対側で乗合タクシーを拾いラマラに向かいますが、この時だけデビッド・グラントが人数を確認します。その後は、昼食やラマラ市内の移動、ラマラからエルサレムへの帰路は、自己責任なのです。最後の方では状況もつかめたので、万が一1人になっても大丈夫であると自信がつかいましたが、最初はラマラ市内で取り残されないようにいつも不安でした。何せ言葉も分からず、土地勘もないわけですから。

#### （４）投票日の状況と選挙監視

投票は午前7時に始まり、午後7時に終了します。当日、6時15分にホテルを出ていつものとおりバスで“カランディア”チェック・ポイントに向かいました。Bill Rose という72歳のアメリカ人が加わり4名になりました。丁度7時にチェック・ポ

イントに到着、監視任務開始です。しかし国際社会の関心の高まり、イスラエル当局の指示なのか、投票日当日はイスラエル軍が特に意識的にチェックを遅らせている様子はなく、むしろ、いつもより通過はスムーズでした。この間、“パレスチナ/イスラエルにおけるキリスト教超教派同行プログラム”、“オランダ監視ミッション”、“フランス監視ミッション”一行が何れもラマラからエルサレムの方にチェック・ポイントを通り抜けて行きました。

当日はパレスチナ人は投票のために休日ですが、チェック・ポイントを通るパレスチナ人がいかにも少ないのです。従って本当に平穏な半日を過ごしました。よく考えてみると、このチェック・ポイントは確かに普段は最も交通量の激しい所ですが、東エルサレム選挙区の北端にあり、ここを超えればすぐ隣のラマラ選挙区になることに気付きました。しかもチェック・ポイントを挟んだ両側、特にエルサレム側は、かなり広く緩衝地帯になっています。従っ



26日チェック・ポイント1：エルサレム側の“カランディア”チェック・ポイント。遠くの白いボードにはユダヤ人マイノリティの“ポーランドでのナチの強制収容所とこのチェックポイントが同じである”との声明が、隔離壁に反対するイスラエル人によって書かれている。

て、このチェック・ポイントを通して東エルサレムの投票所に行く有権者の数は極めて少ないのではないかと推測されます。此処での我々の最大の困難は寒さ対策でした。晴天であるだけに余計エルサレム地方の風の冷たさが身にしみました。可哀想に Susanna Farahat は体調を崩し、また、Bill Rose も鼻水をたらして苦しそうでしたので、タクシーを拾ってラマラ中心街まで暖かい食事を取るために連れて行ったほどでした。

午後は旧市内有名なダビデの塔のあるヤッファ門近くに急遽設置された仮設郵便局投票所に行きました。係員のいるカウンター部分を除けば 50 平米もないスペースで、10 人も入れば身動きが取れないほどです。市内 6 箇所 of 郵便局の投票所で仮設は此処だけと後で聞きましたが、すぐ側に通常の郵便局があるにも拘らず、なぜ仮設にしたのか理由は分かりません。勿論イ

スラエル当局の指示です。550 人の有権者がここで投票することができます。しかし、午後 8 時現在、投票した人数は 140 名弱でした。前に投票は午後 7 時までと書きましたが、締切りの 10 分ほど前に急遽締切時間が延長されたのです。午後 8 時時点で何時まで延長になったのか分かりませんでしたので、私の選挙監視の任務を終了しました。もし、選挙結果が接戦であったなら、このことは選挙結果をめぐる大きな紛争の種となったことでしょう。

#### (5) NP の参加の意義

スリランカの大統領選挙では国際監視団の 1/3 以上を NP が占め、NP が中心的な活躍をしましたが、1,000 人を超える国際監視団の中で 40 名ほどの NP の参加は、NP にとってどのような意義があったのでしょうか。私は色々とは有意義であったと思います。



ラマラ側はこのように道路が未整備で、且つエルサレムに向かう車がチェック・ポイント待ちで列をなしている。

まず、NP の参加者を始め機会あるごとにデビッド・グラントが NP の活動を紹介できたこと、国際監視団の集まりで NP 関係者が大いに発言して存在感を示したこと、そして何よりも、NP 関係者が世界の紛争の原点であるイスラエル/パレスチナの現状を、行動することで体験できたことにあると思います。そして、今後 NP がこの問題に絶えず関心を持ち、様々な形で参画の機会が増えることでしょう。名前を忘れましたが、デビッド・グラントによると NP 即ち大規模な非暴力による紛争解決の

原点はパレスチナで発生したとのことでした。

最後に、私にとってはスリランカと同様に同じ志を持った多くの先輩、同志を知ることができたのは望外の喜びでした。NPJ の中原隆伸氏とは色々話す機会があり、彼の高い志に希望を与えられました。紙面の関係、時差ぼけのため十分に意を尽くした報告が出来なかったことご容赦願います。



INTERNATIONAL  
NONVIOLENCE  
CONFERENCE

Bethlehem, Palestine  
December 27-30, 2005

Celebrating Nonviolent Resistance

## ベツレヘムで開催された 第一回国際非暴力抵抗会議に参加して

NPJ 理事 清末愛砂

パレスチナ暫定自治区のベツレヘムで、2005年12月27日から4日間にわたって開催された第一回国際非暴力抵抗会議「非暴力による抵抗を祝福する：互いの経験から学ぶこと」(Holy Land Trust と Nonviolence International による共同主催)に参加した。同会議に参加した大きな理由は、私自身が2002年の春以降、パレスチナで非暴力直接行動による抵抗運動を続けている国際連帯運動の活動にかかわってきたということもあり、パレスチナ

人による非暴力運動の歴史に大きな関心を寄せてきたからであった。

会議の名称に「国際」(international)と文字がついている以上、パレスチナの非暴力抵抗運動に関するディスカッションをすることだけが会議の目的ではなかったものの(シンポジウムのなかでは、動物愛護運動に関わっているという立場から、非暴力について語るスピーカーもなぜか?招待されていた)、会場がベツレヘム



ということもあり、全体会のシンポジウムやワークショップのテーマの多くが、パレスチナ人による非暴力抵抗運動に関するものであった。スピーカーとして、被占領地（1967年にイスラエルに占領された東エルサレムを含むヨルダン川西岸地区とガザ）で長年にわたって、非暴力抵抗運動に関わってきたガッサーン・アンドーニ（国際連帯運動の創始者の一人。ビルゼート大学教員）や医師のムスタファ・バルグーティ、イスラエルが現在建設中の「分離壁」（アパルトヘイト壁）によって、農地の強制接収などの直接的な被害を受けている村で非暴力による抵抗運動を続けている大衆委員会のメンバーなど、非暴力運動に積極的に関わっていることでその名が知られるパレスチナ人が招待されていた。

もちろん、非暴力運動・思想研究の第一人者であるジーン・シャープも、特別スピーカーとして招待されており、参加者は彼の発表が終了すると、立ち上がって拍手を送った。

400名を超える参加者があり、その多くはアメリカやヨーロッパ諸国の出身者、および被占領地に住むパレスチナ人であったが、アフリカ諸国からの参加者もあった。イスラエル人として、自国の占領政策に反対する活動に従事している活動家も参加しており、全体会のスピーカーとして発言をしたり、ワークショップのファシリテーターなどを務めていた。

残念なことに東南アジアおよび東アジ

ア出身者は、Nonviolence Internationalのバンコク支部のスタッフであるフィリピン人、チベット解放運動に従事しているアメリカ在住のチベット人、それから私と私の友人で、テル・アヴィーヴ在住の日本人の4名であった。インドの非暴力運動の活動家は、イスラエル大使館にビザの発給を拒否され、会議に参加することができなかったという。また、アジア諸国からの参加者が少なかった理由には、ビザの発給問題に加えて、パレスチナに行くための渡航費と滞在費（ホテル代や食費など）が必要だということと、会議の登録費（四日間の参加費と昼食代などを含む）として、全行程に参加した場合、少なくとも100ドルを払う必要があったことなどが挙げられるだろう。ナーブルスに住むパレスチナ人の友人二人を会議に誘ったが、とても100ドルを支払うことはできないということで、彼らは会議への参加を断念せざるを得なかった。

この会議のなかで最も印象深かったことは、多くのパレスチナ人のスピーカーが、「占領下におかれている被占領地に住むパレスチナ人の多くは、占領者であるイスラエルに対して、非暴力による抵抗運動を続けてきた。パレスチナには非暴力運動の長い歴史がある。

しかしながら、パレスチナの抵抗運動を語る時、非暴力か、暴力かという二分法による判断を安易に示すべきではない。占領されている限り、武装闘争もまた抵抗手段としては正当性があるが、戦略としては

有効なものであるとはいえない。自分が非暴力による抵抗運動を支持するのは、非暴力による大衆運動がより効果を生み出すと考えるからだ」といった主旨の発言を繰り返していた点だろう。

パレスチナでは、非暴力による抵抗運動のことを指して、大衆抵抗という言い方をしている。現実的に、多くのパレスチナ人が表に出て、軍事占領を強いるイスラエル軍に対する抗議デモを組織したり、壁の建設によって自分の農地を接収されている農民たちは、イスラエル軍の攻撃にあいながらも、村をあげて建設に反対する抗議行動を続けてきた。(非暴力による)抵抗運動を続けてきたことを理由に、パレスチナをイスラエル当局によって追放された経験を有するムバラク・アワード(Nonviolence Internationalの創始者)は、そのスピーチのなかで、「権利を行使しなければ、権利が消える。外に出てその権利を行使すれば、権利はそこに存在し続ける」と主張しながら、非暴力による抵抗運動の意義と継続を訴えた。

非暴力による抵抗運動の現場の一つであるビデゥ村出身で、国際連帯運動のコーディネーターを務めるマンスール・マンスールが語ったことも、非常に大きな共感をおぼえるものだった。彼は、「パレスチナ人が参加していなければ、それはパレスチナの非暴力による闘争だとはいえない。現場で活動をしているパレスチナ人こそが、その闘争の主体として動くことになる。

女性や子どもたちと情報を分かち合いながら、希望を持って活動を続けていきたい」と力強く主張したのだった。徹底した弾圧を受けながらも、希望を捨てずに活動を継続してきたという彼の自尊心に圧倒されるとともに、そのときの私には、その自尊心が限りなく「美しいもの」に思えた。

会議の二日目の夜には、ベツレヘムおよびその周辺に住む少女たちが、踊りと短い英語のセリフを用いて、占領下の生活を表現するパフォーマンスを披露してくれた。この日のために一所懸命練習したのだろう。過酷な状況が表されているにもかかわらず、彼女たちの息のあったパフォーマンスに、参加者の多くは感銘を受け、盛大な拍手を送っていた。

三年ぶりに訪問したパレスチナで、非暴力運動に従事してきた多くの友人たちの無事を確認することができたということ、新しい仲間に出会うことができたということ、そして、彼・彼女たちとの交流を通して、非暴力という手段がさまざまな抵抗運動に与える大きな意義・効果について再考することができたということが、今回の会議で得られた最大のものだった。

次回の会議では、単に参加者の経験を聞くだけでなく、自分自身が関わってきたフィールドで得たものをさらに多くの人々と共有すること—今回の会議のサブ・テーマ「互いの経験から学ぶこと」そのものであるが—ができればと考えている。

\*\*\*\*\* **今後の予定** \*\*\*\*\*

**理事会・総会のお知らせ**

今年度の総会を下記のとおり開催します。第一次派遣の大島みどりさんが帰国し、今後のNP支援、NPJの活動を話し合う重要な会議ですので、万障お繰り合わせの上、ご参加ください。総会への提案も積極的にお寄せください。

なお、会員の方の理事会オブザーバー参加も歓迎致します。

日時：2006年3月26日（日）

午後1時～4時 理事会、午後5時～7時 総会

場所：文京シビックセンター・4階会議室A

東京都文京区春日1-16-21 Tel: 03-5803-1105

交通：東京メトロ地下鉄丸の内線・南北線「後樂園駅」徒歩1分

都営地下鉄三田線・大江戸線「春日駅」徒歩1分

議題：今年度予算・事業報告、来年度予算・事業計画、その他

■ **非暴力連続講座 第18回**

**スリランカでの非暴力介入の到達点と今後への課題**

1月28日に非暴力平和隊（NP）スリランカ第一次派遣のメンバー、大島みどりさんの報告会を行いました。2年間に渡るスリランカでの活動の状況が報告されましたが、そこでは話しきれなかった点などを中心に、スリランカが抱えている暴力の状況や、NPの非暴力介入の実践での成果と見えてきた課題などを大島さんに話していただきます。その中から今後のNPの活動や非暴力運動のあり方について、あるいはこの非暴力連続講座のこれからの進め方なども含めざっくばらんに参加者の皆さんと話ができたと思います。報告会に参加できなかった人も、講座は初めての人もどうぞご参加ください。

講師：大島みどり（元NPフィールド・チーム・メンバー、NPJ理事）

日時：3月4日（土）午後2時～5時

会場：文京シビックセンター4階・和室1

交通：地下鉄「後樂園駅」「春日駅」徒歩1分

参加費：800円

■ **3月・月例会**（日時はお問合せください。またはウェブサイトをご覧ください）

場所：NPJ事務所（三田線白山駅下車、A1出口より徒歩2分、モスバーガーと同じビルの3階。わからない方は駅からお電話ください）

参加費：飲食実費（1000円程度、飲み者・食べ物持ち込み歓迎）

## 会 員 募 集

- 非暴力平和隊の理念と活動に賛同・支援して下さる個人および団体を会員として募集しています。入会のお申し込みは、郵便振替、銀行振込、非暴力平和隊・日本ウェブサイトの「入会申し込みフォーム」をご利用下さいますようお願いいたします。

### ◎ 正会員（議決権あり）

- ・ 一般個人：1万円
- ・ 学生個人：3千円
- \* 団体は正会員にはなれません。

### ◎ 賛助会員（議決権なし）

- ・ 一般個人：5千円（1口）
- ・ 学生個人：2千円（1口）
- ・ 団体：1万円（1口）

- 郵便振替：00110 - 0 - 462182 加入者名：NPJ

\* 通信欄に会員の種類を(賛助会員の場合は口数も)ご明記ください。例：賛助個人1口

- 銀行振込：三井住友銀行 白山支店 普通 6622651 口座名義：NPJ代表 大畑豊

\* 銀行振込をご利用の場合は、お手数ですが電話・ファックス・メールのいずれかを通じて入会希望の旨、NPJ事務局までご連絡くださいますようお願いいたします。

- ウェブサイトからのお申し込み：<http://www.5f.biglobe.ne.jp/~npj/nyukai.html>

■ 案内：『平和・人権・NGO すべての人が安心して生きるために』君島共同代表が『平和・人権・NGO すべての人が安心して生きるために』（新評論）に、「平和をつくる主体としてのNGO」という章（約30ページ）を書いており、この中で非暴力平和隊のことを詳しく紹介しています。出版社のご厚意により、この1章の抜き刷りを作成し、配布させていただけることになりました。是非、非暴力平和隊の紹介にご活用ください。A5版・表紙カラー・一部300円（送料別）、ご注文は事務局まで。

## ▲◆◎◎◎◎◎ 事務局便り ◎◎◎◎◆▲

今号は期せずともりだくさんの増ページ号になりました。添付資料でNPSLからの緊急要請を同封いたしました。ぜひご協力いただければと思います。マスコミではなかなか現地の詳細はわかりませんが、和平の行方はかなり混沌としているようです。またイラク情勢も混迷を深めています。前号で声明を出しました、イラクで誘拐されたクリスチャン・ピースメーカー・チームのメンバーたちに関する新しい情報は今のところありません。無事を祈りたいと思います（大畑豊）

### 非暴力平和隊(NP, Nonviolent Peaceforce)とは……

地域紛争の非暴力的解決を実践するために活動している国際NGOで、非暴力平和隊・日本(NPJ)はその日本グループです。

これまで世界中の平和活動家たちが小規模な非暴力的介入について経験を積み、功を収めて来ました。NPはこれを大規模に発展させるために2002年に創設されました。非暴力・非武装による紛争解決が「理想主義」でも「理想主義」でもなく、いちばん「現実的」であることを実践で示していきます。

NPは、地元の非暴力運動体・平和組織と協力し、紛争地に国際的なチームを派遣、護衛的同行や国際的プレゼンス等によって、地元活動家等に対する脅迫、妨害等を軽減させ、地域紛争が非暴力的に地元の人によって解決できるよう、環境づくりをすることを目的としています。

NPは2003年9月からスリランカでの活動を開始し、現在16カ国から25人のメンバーを派遣し活動しています。

